阿南市公園計画におけるトータルサイン計画の適用事例

建設材料試験所　正会員　○松永昭博
建設材料試験所　正会員　澤田俊明
阿南市役所　正会員　篠原明広
徳島大学工学部　正会員　山中英生

1．はじめに

徳島県阿南市において、中心市街地周辺10km四方の津峰山周辺地域を対象とした日常身近な空間のグランドデザイン案「阿南市民リゾート構想」が提案されている。本研究では、「阿南市民リゾート構想」のもとで整備された２～３の公園計画におけるトータルサイン計画とサイン計画時における異分野の専門家との協同作業によるコラボレーションについて報告する。

2．阿南市民リゾート構想[1),2),3),4)]の概要

阿南市は、徳島市の南約20km、四国の東端に位置し、人口は約58,700人（平成７年）、面積は251.48km^2、農林率が約80%と農村地域が大部分を占めている。津峰山周辺の阿南市市街地地域は、自然的屋外空間に恵まれ、本地域の「山の景」・「川の景」・「池の景」・「農の景」・「海の景」の５つの「景」からなる地域のポテンシャルは非常に高い。しかし、現在これら地域のポテンシャルの高さが市民や行政、専門家などに十分に認識されておらず、市街地周辺地域は、①日常身近な屋外空間整備のマスタープランの欠如、②景観要素の分断、③一体整備の必要性、④「農の景」の過小評価といった４つの課題を抱えている。「阿南市民リゾート構想」は、この４つの課題の解決策として立案され、市民の日常生活の中で先の５つの「景」からなる地域のポテンシャルの活用を提案するもので、市民のための『日常身近な阿南市民リゾート空間の整備』を計画コンセプトとしている。

3．トータルサイン計画

トータルサイン計画は、点在する阿南公園、津乃峯公園、大谷山公園の３ヶ所で相互に関連するものとして計画・整備された。サインの目的は、行政・市民・企業等に対して５つの「景」のすばらしさを知ってもらうこと、そして「阿南市民リゾート構想」の共有化を図ることの２つである。サインの役割は、阿南の自然、歴史、風土により形成された有形、無形の景観要素の【認識】・【連携】・【共有化】を図り、日常忘れられかけた身近な環境へのアプローチとなる情報発信にある。それぞれのサインは計画地個別のサインとしてでなく、相互に関連性を持ったネットワーク型のサイン群として計画している。市民と地域のコミュニケーションメディアとしてのサインは、わかりやすさと親しみやすさを第一として表現方法を工夫している。

サインは、次の３層から構成される。【エリアサイン】は、「阿南市民リゾート構想」の共有化サインとしての性格を有し、計画地域全域の景観要素の空間的な相互関係を表現している。【スポットサイン】は、個々の景観要素をとりあげ紹介した。景観要素の基礎的情報を提供する上で、環境教育的配慮として、エコミュージアムの視点なども導入した内容としている。ここでは、多種多様な環境情報をわれわれに発している景観要素のトータルな認識や理解が重要な意味を持ち、市民が自分達の住んでいる町を再発見する最初の動機づけとなる情報発信をサインが行っている。【掲示枠】は、市民と行政あるいは市民と市民の情報交換

図－１　サインキャラクターの例

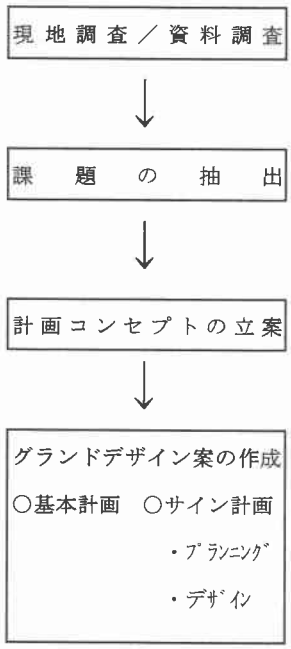
を行う双方向サインとして他の２つの層のサインとセットで計画している。これら３層のサインには、景観要素をモチーフとした【サインキャラクター】が登場する。サインキャラクターは、自然、歴史、風土といった個々の地域の特色を語る構成となっている。これらキャラクターは、本来関連性があるにもかかわらず、交通アクセスの不便さなど物理的、社会的制約により希薄となった景観要素あるいは地域を空間的に連携し、また、「阿南市民リゾート構想」の市民による共有化の共通言語となるトータルサイン計画のキープレイヤーなのである。

４．コラボレーション

トータルサイン計画では、公園設計者とグラフィックデザイナーが調査、プランニング、デザインといった一連の作業を「協同」としてのコラボレーションの形態で行った。コラボレーションとは、異なる分野の専門家がひとつの仕事を行うことで、ランドスケープアーキテクトの佐々木葉二によれば、①「協力」としてのコラボレーション、②「競作」としてのコラボレーション、③「協同」としてのコラボレーションの３つに区分される[5]。この中で佐々木は、「協力」及び「競作」としてのコラボレーションは、分業的でありそこで新しく発生する行為の場は生まれないとし、協同は個々の領域を互いに開く関係であり「協同」としてのコラボレーションこそ本来のコラボレーションであると主張している。

今回のトータルサイン計画は、「阿南市民リゾート構想」の立案とほぼ同時進行的に、佐々木の言う「協同」としてのコラボレーションの形態で行った。図－２に作業の流れを示す。景観要素の把握など調査の初期段階から公園設計者とグラフィックデザイナーが共同で作業を進め、サインデザインの原画が完成されるまでの期間は、約６ヶ月であった。「協同」としてのコラボレーションのメリットは、計画コンセプトに対する理解はもとより、公園設計者とグラフィックデザイナーの双方が、共通言語を持ち具体的イメージを共有化した上で議論が行えることにある。グラフィックデザイナーは構想の基本計画へ、公園設計者はサインデザインの細部まで、互いの分野への意見や助言が与えられようになる。

現状でのコラボレーションにおける問題点は、公園施設等に計画されるサインにおいては、多くの場合、公園設計者が設計を行った後、分業としてサインメーカーにデザインから施工までを依頼するのが一般的である。その結果、計画コンセプトや自然、歴史、風土などの地域固有のポテンシャルを十分に反映していないサインも数多く見受けられる。今後、種々の公共事業において、一つのプロジェクトに対し複数の異なる分野の専門家が混在する場合、「協同」としてのコラボレーションの重要性が増すであろう。



図－２　サイン計画の流れ

５．おわりに

これまで、われわれの日常身近な生活空間は、あまりにも身近すぎ、そして規模が小さいということで、“大きなものほど価値が高い”とされてきた２０世紀においては、さほど重要視されてこなかった空間といえる。今回紹介した事例は、人々の生活環境改善の上で、この日常身近な生活空間に焦点をあてた事例として紹介した。

［参考文献］

1)阿南市役所：阿南市都市公園基本計画業務　報告書、1995年3月
2)松永、澤田、山中、篠原：地方都市における身近な生活空間の環境整備計画，土木計画学研究・講演集19(1)PP.121-124，1996年11月
3)松永昭博：新地域主義の時代ｼﾘｰｽﾞ13 日常身近な阿南市民リゾート空間の整備，近代建築VOL.50 PP.19-21，1996年2月
4)松永昭博：新地域主義の時代ｼﾘｰｽﾞ14「阿南市民リゾート構想」におけるサイン計画，近代建築VOL.50 PP.30-31，1996年3月
5)佐々木葉二：ﾗﾝﾄﾞｽｹｰﾌﾟにおけるｺﾗﾎﾞﾚｰｼｮﾝの現在，都市環境ﾃﾞｻﾞｲﾝ会議 JUDINEWS 034，1997年1月